

## 旧宝塚公会堂の建設および使用の経緯と建築の概要

本会員 ○安野 彰\*

郊外住宅地	昭和初期	阪神間
竹中工務店	公会堂	遊園地

## 1 はじめに

宝塚音楽学校は、平成10年、新築された建物に移転した。それまで使用されてきた鉄筋コンクリート造三階の建物は、宝塚ファミリーランド(前身は宝塚新温泉)の一面に立地していたため、平成15年、遊園地が実質的に閉園を迎えた際に解体される予定であったが、昨年、市が買い上げて保存・再生することが決まった。

この建物は、当初は、阪神急行電鉄が経営する宝塚新温泉の一施設で、昭和10年に宝塚公会堂として竣工している。しかし、昭和12年7月からは、音楽歌劇学校の使用に供し、平成10年の学校移転に至るまで、概ね同校の校舎として機能してきた<sup>1</sup>。玄関前での合格発表や卒業記念写真撮影の風景は、恒例の行事として全国的に報道されてきた。これらの印象が強いこともあって、この建物が、一時期でも校舎とは異なる利用に供していた事実や建築物としての価値については殆ど知られていない。しかし、地域にとって重要な意味のある場所を継承するうえで、その由来と履歴を知ることは、不可欠といえる。本稿は、当該の建築物が建設・使用されてきた経緯、建築の特徴等について、現段階までに得られた資料で検討することを通して明らかにするものである。

## 2 建設および使用の経緯

設計は、竹中工務店によることが明らかになった。同社設計部の図面承認欄が押印された「宝塚公会堂新築設計図面」の所蔵が確認できた(図1、2)<sup>2</sup>。また、同社には、設計者: 糸川政雄、作業所長: 綱岡寅吉、工期: 昭和9年10月10日～、という記録が残っている。ただし、図面を現存建物と比較すると一階北側と東南側の窓配置やプラン、3階のプランなどで違いを認められる。一方、施主である阪急電鉄にも各階平面を下敷きにした「衛生工事設計図」4枚が残されている<sup>3</sup>。昭和9年6月28日の日付で、大阪城口研究所設計部の記名がある。細部が簡略化されているものの、ほぼ実際の建物と符合し、竹中所蔵の図面より後に設計最終段階で作成されたといえる。

竣工は、昭和10年3月20日とされている<sup>4</sup>。当初の木造案は結局、鉄筋コンクリート造三階建で落成した。柿落としは、昭和10年4月25日から同年5月28日までの皇国海軍博覧会で、主会場として使用された<sup>5</sup>。以降も新温泉が主導する博覧会場に利用されたことが判る<sup>6</sup>。

宝塚公会堂が計画される背景について詳細を記す資料は今のところ見当たらないが、昭和9年4月19日付の

記事に凡その内容が報じられている<sup>7</sup>。ここでは、宝塚新温泉内の中劇場が集会場を兼ねていた状態から、集会専用の施設を設ける目的で計画されているとある。この時点では、木造二階洋式の建物の一階に800人収容の大ホール、二階に小集会室と講習会場を設ける予定で、音楽歌劇学校寄宿舎を取壊した敷地に建設、寄宿舎は女子青年会館に移動するとされている。

竣工時の報道では、皇国海軍博覧会終了後は一般に開放されることが記されている<sup>8</sup>。より具体的には、博覧会閉幕直後の6月1日の記事に、「高級託児所といった幼稚園と母の會」や「花嫁学校」の検討と、同時に各室の使用料について詳細に記されている<sup>9</sup>。新温泉という遊園地内にありながら、近隣社会に開かれた公共施設としての性格を持たせようとしていたことが判る。

高級託児所や花嫁学校が実現したかは不明であるが、まもなく、6月下旬以降、宝塚女子青年会が公会堂を本拠に活動を始めている<sup>10</sup>。女子青年会は、昭和6年、新温泉内に宝塚女子青年会館が設置されると同時に成立した会員制の組織で、阪神間に居住する婦女子が、集会や講習会を開催するなどの活動を行った。昭和8年までは、主に女子青年会館での活動であったが、昭和9年から10年初期の間は、同じく新温泉内に立地した文芸図書館が利用された<sup>11</sup>。これは、前記の報道のとおり、公会堂建設のため学校の寄宿舎が取り壊され、女子青年会館が寄宿舎に転用された結果と考えられる。稼働中の図書館利用という一時避難的な措置の後、公会堂の利用が可能になって直ぐに活動場所を移す経過を見る限り、女子青年会は、新拠点となる公会堂の竣工を待っていたものと思われる。また、前記した、竣工前の作成と考えられる諸図面を見ると、一階が講堂、二階が展覧会陳列場、三階が講習室2室と料理講習室となっている。女子青年会では、会の設立当初から料理教室も度々催すなどしており、活動内容と室構成が一致している。このことから、公会堂は、女子青年会が、専用しないまでも、ある程度は使用することを前提に計画されていたと考えられる。

その後、公会堂は、宝塚音楽歌劇学校の校舎に転用され、以降、敗戦前後の接収を除いて、平成10年まで、同校の建物として使用された<sup>12</sup>。昭和12年7月の『歌劇』「宝塚ニュース」欄では、以降は本科生の校舎になることが示されている<sup>13</sup>。一方、組織としての女子青年会は、同じ頃、機関誌『宝塚女青』が不敬記事を掲載したとして

Details of Construction and Employment of the Former Takarazuka Public Hall and Outline of Its Architectural Feature

YASUNO Akira

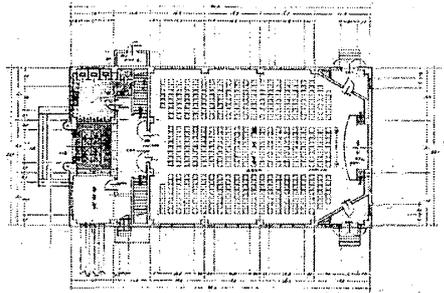


図1「宝塚公会堂新築設計図 1 一階平面図」より（部分 竹中工務店蔵）

摘発され、活動停止を余儀なくされている<sup>14</sup>。このことが、音楽歌劇学校へと転用される契機になったと考えられる。

### 3 建築の概要

プランは、前記の竹中工務店所蔵の図面を参照すれば、ファサードをつくる1スパン、縦動線が収まる1スパン、主要室が収まる矩形の3つに分節ができる。主要室が収まる矩形は、長辺を16.5尺で4つ、短辺を16尺で3つに分割して柱心位置をとっている(図1)。建物全体では、90×48尺の矩形に幾つかの張出し部分がある格好になっている。主要な室の構成は、前節で述べた通りであるが、入り口から近い階に、より利用者の多い室を配していると考えられる。館内混雑の緩和を考慮していたとすれば、両側に階段があるのは、特に2階の展覧会陳列場への往復動線を交錯させない意図と見ることができる。結果、左右対称が基調的特徴的な平面となっている<sup>15</sup>。

建築様式は「ライト式」と紹介されている<sup>16</sup>。ライト的手法が顕著とは言い難いが、水平的な要素で全体を強調しつつ、矩形を構成的に組み合わせた外観にその傾向を見て取れる。特に東南側の縦動線を収めた矩形の箱を片持ちで地面から浮かせて矩形同士の相関を強調している点、玄関部分の廂を大きくとって左右に回り込ませ、水平性を強調している点に着目できる。一部、エントランスの内部にスクラッチ・タイルが使用されていることもライト式という表現の根拠と思われる。ファサードでは、額縁を横長に連続されることで、水平連続窓風の開口をつくっている。また、階段室踊り場の窓は、出隅をサッシュ枠のみで成り立たせており、軽快なつくりとなっている。これらの表現には、インターナショナルスタイルの影響も認められよう。さらに、各所に設けられた円窓は、アール・デコ的とも捉えられるなど、全般的には、当時の日本における近代建築のいくつかの流行を取り入れ、それらを巧みに纏めたデザインといえるだろう(図2)<sup>17</sup>。

### 4 まとめ

宝塚公会堂は、竹中工務店により設計された。遊園地内にありながら、一般市民が集会や講習会などを催せる公共施設としての性格を有していたことが明らかになった。また、宝塚女子青年会の新たな本拠地として計画された側面がある可能性の高いことを指摘できた。加えて、

\*文化女子大学 講師・博士(工学)

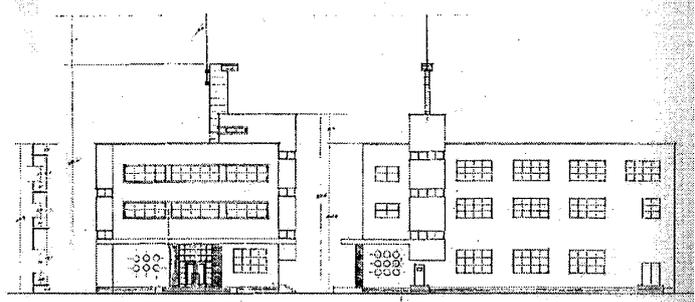


図2「宝塚公会堂新築設計図 6 姿図其ノ一」より（部分 竹中工務店蔵）

全体としては簡潔な構成ながら、細部に当時の表現がよく顯れた建築であることを示した。

- 1) 音楽学校の名称について。大正7年、宝塚音楽歌劇学校設立、昭和14年、宝塚音楽舞踊学校と改称、昭和21年、宝塚音楽学校と改称。
- 2) マイクロフィルムが保管されている。ナンバリングされた1～10のうち、9を除く9枚を確認できた。内容は、各階平面、断面、姿図、集会室詳細。阪急側の所蔵にも、同様の体裁で0番の配置図1枚が存在する。
- 3) 阪急電鉄創遊事業本部で閲覧している。
- 4) 『京阪神急行電鉄50年史』京阪神急行電鉄 昭和34年
- 5) 大阪毎日新聞 昭和10年4月23日。計画時の報道には、一階のホールを無柱で作るとあり、これを木造で実現できずに構造の変更が生じたと考えられる。竣工時の報道では、ホール収容人数も500人に減じている。大阪毎日新聞の竣工報道は、昭和10年4月23日にされているが、これは、諸々の雑工事のほか、こけら落としとして25日から開催される皇国海軍博覧会の会場として使用するための準備などが残っていたためと思われる。
- 6) 昭和10年7月20日～8月20日 通信文化博覧会、昭和11年3月20日～5月10日 婚礼進歩博覧会、昭和12年7月～11月末 支那事変解説展覧会 Cf. 『京阪神急行電鉄50年史』京阪神急行電鉄 昭和34年、池田文庫所蔵の新聞スクラップ資料より
- 7) 大阪毎日新聞 昭和9年4月19日
- 8) 大阪毎日新聞 昭和10年4月23日
- 9) 大阪毎日新聞 昭和10年6月1日 『阪急寶塚経営部がこんどは幼稚園や花嫁学校に手を着ける—この間の博覧会場にあてため今春十萬円の工費で竣工させた新温泉内公會堂の利用策として外園課では今回こゝに高級託児所といった幼稚園と母の會、それに附随した花嫁学校を開設する計畫を立て準備中だが幼稚園はお子達が好きな動物園と植物園をそのまゝ教室とした空室の下の明朗は實地教育に重きをおき阪大病院の教授連を顧問とした健康相談所を常備、随時赤ちゃん展なども開く、花嫁学校の先生はその道の權威者を網羅して洋裁、料理、育児から變つたところで夫の操縦法まで傳授するのだと(中略)三百人を収容し得る一階ホールが平日十五円、日曜祭日十八円、二階の展覧会場は平日十二円、日曜祭日十五円と決定。需要に應ずることになったが三階は諸種の講習會場に充てられる。』
- 10) 松本佳子によれば、女子青年会の機関誌『宝塚女青』には、会則として、本部が公會堂にあるとされている。松本佳子『昭和初期の阪神間郊外住宅地における女性の社交活動—宝塚女子青年会を例に—』『日本建築学会計画系論文集』No.516,281-287,1999年2月
- 11) 前掲 松本佳子
- 12) なお、敗戦の前後については、資料が少なく、確証はないが、橋本雅夫氏によれば、昭和19年6月の海軍による接収後、予科練の教室として使われ、戦後、入れ替わって連合軍が21年2月まで接収していたという。
- 13) 『歌劇』205号 昭和12年7月
- 14) 大阪日日新聞 昭和12年7月16日
- 15) 両側に階段を設けるなど、左右対称のプランは、宝塚新温泉、パラダイス、大劇場、文芸図書館等、宝塚新温泉の代表的な建築物に共通する点であるが、その理由は不明である。
- 16) 大阪毎日新聞 昭和10年4月23日
- 17) また、玄関両側に用いられているタイルやその上部に架かる廂などには、竹中工務店が同時代に手がけた大阪朝日ビル(昭和6年)や阪急ビル(昭和4,11年)に類似を認めることができる。現状は、建具がアルミサッシュに代えられ、内部も後年に多くの間仕切りが設けられている。建具は、かつての写真を見ると、ファサード側に迂り出しが、側面に開き戸が用いられている。

\*Lecturer, Bunka Women's University, Dr. Eng.